



サクラを加害するアメリカシロヒトリの幼虫



羽化したばかりの成虫

家の窓越しにサクラの花を眺められるとは、なんとも優雅なことである。でも、サクラはダメ！！ケムシがつくから、という主婦層からのダメ出しがそのNGに決定的な追い打ちをかける。

サクラの葉を坊主にさせるケムシとして、1945年、東京に侵入して、昭和30～40年代、その被害が猛威を振るったのが、北米大陸からのアメリカシロヒトリというガの幼虫であった。ちょうど、盛んに発生を繰り返していたころ。私は、府中市にある東京の大学にいて、キャンパスに発生を繰り返すこのケムシを使って、研究をする機会を得た。こうして、今も「昆虫研究家」と名乗ってられるのも、この「ケムンパスサマ」のおかげである。

「静岡のアメシロは年に2化ですが、3化もあるんじゃないですか」という問いは、いつも県内の害虫や多くの昆虫の動きに高い関心をもっておられる袋井市の池田二三高さんからであった。

アメリカシロヒトリは最近その発生程度が、だいぶおさまっているような気がしている。静岡市内でも、公園や川の岸辺のサクラに、この虫の初期被害の特徴である葉脈を残して透けた白い巣をそれほど見かけないからである。市の公園などでは、あるいは恒例の作業として薬剤散布が行われているためかもしれない。

いずれにせよ、発生が年に1回、年に1化ということはすっきりしている。そしておよそ春、夏の2化というも、まずまず間違いがない。このアメリカシロヒトリはもともと北米原産であるが、アメリカ大陸には広く分布していることもわかっていた。しかし、どこから年2化の個体群が日本へ侵入してきたか、当時私も加わっていた「アメリカシロヒトリ研究会」の研究者仲間によって明らかにされていった。その謎解きの詳細な取り組みは、「中公新書 アメリカシロヒトリ 種の進化の歴史の断面、1947年」につぶさに著されていて、今読み返しても当時の会員たちが取り組んだ熱き想いに感動する。

鳴く虫や、チョウ目の、多くの昆虫の飼育に秀逸な技術で取り組んでおられる杉本武さんに、駿河区高松町のアメリカフウの並木で、越冬世代の幼虫が蛹となる8月中旬、発生現場を案内していただいた。十分適当数といえる材料を確保できた。その飼育結果のあらましを以下に示そう（平井剛夫、2012年 駿河の昆虫）。アメリカシロヒトリの発生がいくらか下火になるうとした頃、全国に分布を拡げていった。その後、この種は、3化するという、つまり2化性が3化性へと、化性が変わっていることが明らかにされた（M.Gomi, 1996年）。

集めてきた幼虫を我が家のベランダで飼育した。飼育かごに葉のついたサクラの枝をあたえ、すでに分散を始める前の老熟幼虫はすごい勢いで葉っぱを食べ、まもなく蛹になっていった。蛹の自然日長の条件はじゅうぶん補償されているであろう。すると、間もなく蛹となった個体のなかから、羽化が起こった。越冬世代ではなく、休眠しない、すなわち3世代目の成虫が出現したのだ。しばらく室内においておくと、翌年の春になって残りの蛹が、羽化を完了させた。しかし、3化として秋に羽化した個体は飼育しなかつたので、その後どのように発育を経過してゆくかは、確認はできなかつたが、3化の出現が裏付けられたのであった。少なくとも、1年以内にでる回数が増えることは、発生量の増加につながる。今後の出方に注意していきたいものである。